

に誇りを持っている。それに、長岡市のように明治戊辰戦争、第二次大戦による二度の戦災を受けるといふこともなく、大火もなく、歴史的資料の保存が公・私ともに整っている。

このような文化的条件を著者は十二分に活用し、各時代を要領よく区分し、この『昭和前期上越医界史』をまとめられたが、この後の「昭和中期」を編集し、また、「昭和後期」をさらにまとめてみたいと「あとがき」でその抱負を述べられている。是非ともその実現を望みたい。

巻末にまとめられている「医師名簿」は単なる医師名の羅列でなく、昭和前期とは言うものの、明治・大正・昭和の三代にわたって生きたこの地方の医師・歯科医師一人一人についての詳細な履歴書であり、業績目録とも言えるものである。これらの人々のさらなる詳しい事績調査には欠くことのできぬ基礎資料でもあり、鍵でもある。

索引も調っているので検索も容易である。

本学会員という人を得た地方医史の好著と言うことができ。新潟医事史研究には欠かすことのできぬ必携書である。

(蒲原 宏)

〔私家版、千九四三—〇八三四 上越市西城町三—三—二八、電話〇二五五—二三—二五八七、平成十二年十一月、A五判、四一六頁、自費出版〕

編集後記

さきの九月の仙台における第一〇二回学術大会は期待通りの盛会でした。吉田忠会長以下、スタッフの皆様方には心より感謝申し上げます。

抄録号の原稿提出に関しては、当日の評議員会の席上で深瀬委員長より報告・要請がありました。毎年、執筆規定に必ずしも則っていない原稿がいくつもあり、編集委員一同、校正作業には腐心しています。たとえば文字数が規定に満たないもの、逆に多すぎて刷上り二頁では収まらないもの。仮に文字数が規定内であっても、改行を頻繁に繰り返すと収まらなくなります。また常用漢字と旧漢字（正字）の混用（特別の理由がなければ常用漢字の使用が原則）、パソコン（ワープロ）操作ミスによる誤植など。いったん受理されますと校正の段階では著者と連絡をとる時間的余裕がなく、当方の判断で改変せざるを得ないケース、あるいはミスとは思っても確証が無いため、そのまま印刷せざるを得ないケースもあります。重ねてご配慮のほどお願い致します。

このところ投稿論文が多く、嬉しい悲鳴をあげています。矢部く三輪編集委員長の平成元く二年頃には投稿の少なさに苦慮し、その後特集を組むなどして凌ぎ、切り抜けた頃のことを思うと隔世の感があります。

私は昭和六十一年に編集委員を拝命しましたが、同時に編集委員に就任され、のちずっと本会誌の編集刊行に力を尽くされた大村敏郎先生が学会を前に他界されました。去りし日のことどもが懐かしく想い返されます。御冥福心からお祈り申し上げます。

(小曾戸 洋)